

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞 應 寺
印刷所 東田印刷株式会社

新年の挨拶

—茶に逢うては、茶を喫す—

住職 村上 徳 存

新年明けましておめでとうございませう。昨年より引続いて、コロナ感染症、拡大防止の為に自粛が続いております。一応、宣言は解除され、自由に往来でき、経済活動は制限はなくなりましたが、今年は虎年ということ、勢いの良い年で、縁起の良い年廻りとなりましたが、今年こそ平安な年でありますように祈っております。

従容録 第十四則「廓侍過茶」という一則があります。この則は、禅宗史上「徳山の棒」で有名な、徳山宣鑑（七八二〜八六五）禅師と守廓侍者の問答として残っています。

守廓侍者は、臨済義玄（？〜八六六）の弟子、興化存奨（八三〇〜八八八）の弟子守廓上座と推測されている。

徳山和尚は、雪峯義存（八三二〜九〇八）の嗣法の師匠である。徳山和尚の道場に守廓上座が侍者として勤めていた頃のことと思われる。

守廓侍者が徳山和尚に「従上の諸聖、什麼の処に向つてか去るや。」と問をした。

山云く、

「作麼、作麼。」と答えた。

廓云く、

「勅して飛竜馬を点ぜしに、破鼈出頭し来る。」（千里を走るといふ駿馬を用意するようにお願いしたのに、足の不自由な、スッポンがまがり出た。）と言った。

山、更ち休し去る。

来日、山、浴より出ず、廓、茶を過して、山に与う。山、廓が背を撫すること一下す。

廓云く、

「這の老漢、方始めて、警地なり。」

山又た休し去る。

徳山和尚は、禅宗史上に名高い「臨済の喝」と言われる如く、接化の手段は通常

「這い得るも三十棒、這い得ざるも三十棒。」という具合で一種、独特の家風をもつて接化せられた禅匠である。

「探竿手に在り、影草身に隨う」とある。

師家は、一挙手一投足を参学者の問話について、その本人は如何に考え、どういう態度であるかと、一々探っているのである。といわれる。

本則では、守廓侍者は、

「従上の諸聖、什麼の処に向つて去るや。」

（今までの多くの聖人はどこに行つたのでしょうか。）と問うた。

此処の道場には、立派な先輩方や、代々の指導者が居られたが、今何処に行かれたのでしょうかと問うたのでしょうか。

山云く「作麼、作麼。」なんだ、なんだと戸惑ったように答えている。すると、

守廓侍者は、

「立派な千里の馬を引き出そうとして、足の不自由なスッポンが出できたものだ」と、すると、山、休し去る。

翌日、徳山和尚は風呂から出ると、廓侍者が茶を出してきたので、徳山は廓侍者の背を一回撫でると。

廓云く、

「老師は少しは解つたのだろう。」

というと、山は休し去る。

二度の問答共に、徳山和尚は休し去ると、黙つてしまつたのである。廓侍者の間に答え、廓侍者の行動に対応する、徳山和尚は「棒」で有名な激しい指導者とは、打つて変つて二度の無言で応じている。

この則は、徳山の「休し去る」こそ優れた指導者の面目を發揮したものである。といわれるのでしようか。

萬松老人の本則の著語に「虎頭虎尾、一時に収まる。」と締め括っている。

此の則の言わんとする処は、師家と学人の問答往来は、剛を以つて柔を決することは則ち故を是として強に逢うには、弱と応待することにある。

禅門の修行は、寛嚴宣しゅうする

ことを示されたものでしょう。

油断大敵、日常の茶飯にも、茶に逢うては、茶を喫し、飯に逢うては飯を喫する三昧に修行することとは肝要であることも自覚しつつ、本年も精進したく正月早々挨拶いたします。

令和四年元旦所懐

開歳壬寅四海平

一鵝告曉禱新晴

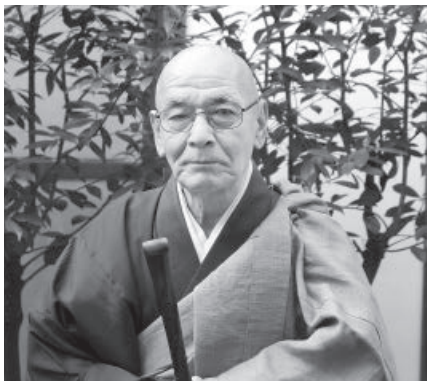
禍源未滅閑栖下

仰望春光照梵城

拝頌

「百拙漸悚、七十九年、四山相い逼り、一錫縁に隨う。」

本年は、本師、先々住、一光方丈二十七回忌に正當いたします。先師に対しては劣徒にて慚愧千萬、衣を汚してばかり、申し訳ないことです。五月に法事を営弁する予定です。再拝



発心 今此処から出発する

後堂 門原 信典



改暦一新

コロナ禍にあつて皆様其々に様々な想いで新年をお迎えの事と存じます。本年も皆様方の身心の御安寧をお祈り申し上げます。

「いつでもどこでも何があつても、そこから出発するしかないんじや」この言葉は、私が初めて瑞應寺に参禅した時に、現東堂栖崎通元老師から直接いただいたお示しです。

あれから四十年。振り返れば慚愧を知るばかりですが、今でも、このお示しは私の修行に生き続けています。

そして僧堂に勤めさせていただき、参玄会、摂心の提唱（講義）で「碧巖録」を読み始め、先月からこの銀杏誌でも連載させていただくことになりました。その第二則が「至道無難、唯嫌揀」です。これは中国禅宗の第三祖鑑智僧璨（西暦六百年代の祖師）の「信心銘」の冒頭の一節から引用されました。一

般的には「至道は難きこと無し、ただ揀を嫌う」と読みます。至道とはもちろん仏道の事。揀とはえり好みをする事。

「仏様の修行は難しいことは無いよ。ただ、えり好みをしないだけでよ。」という意味になります。しかし、えり好みをしない事は簡単な事ではありません。私は敢えて「至道は無難なり、難なり」と先ず読ませていただきます。

今、私は無限の生命・時間・空間。そして、出会いに支えられて生かされています。この生かされている事実には、私の個人的な思いや計らいや、えり好みも関わらない。それが「無の私」です。そして、今此処に人として生まれ、さらに仏法、坐禅に出会う、「受け難き人身を受けたるのみに非ず、遇い難き仏法に値い奉れり」すなわち「難の私」です。ですから「無難」とは、仏道、坐禅を実践する私の事。そして、「唯嫌揀」ですが、こ

の「嫌」と云う字に引っかかります。「嫌う」という事こそ揀、えり好みではありませんか？」と。

しかし、字書を見ると「嫌」は「心に平ならざるなり」つまり不満足、不信の念をあらわします。ですから「揀を抛り所としな」ということになります。

私たちの人間生活の基準は揀です。自分にとつて都合が良いか悪いか、損か得か、全て駆け引き、打算です。それをよくよく見極めて抛り所にしない、基準にしないところにこそ、真実の信仰に生きる私が居るのです。

以前二十歳の青年が急逝されました。

ご家族の悲しみに、どうお慰めしてよいか言葉も見つかりません。

その青年のお母さんが、七日経のお参りの時、独り言のように私に話しかけて来られました。

「子供が死んで悲しくて、悔しくて、辛くて言葉にならない。もう生きていく気力も無い。息子はもう自分の好きな物も食べる事が出来ない。それを思うと私が食事をいただく事は出来ない。そう思っていた。ところがみんなが用意して下さった食膳の前に座ると、自然に箸が出ていた。絶対にご飯なんか食べられないわけ無いと思っていた

のに、しかも私の好きな物からいただいていた。こんな時に私の我儘が出ていた。私はこんなに薄情な親だったのかと思った。また悲しくなつて、泣きながらご飯をいただきました。どういうことでしょうか？」

くのが坐禅です。世間の価値観、人間の損得勘定から言えば、坐禅ほど生産性も無く、非効率で、何の効果も無い、時間と身体が無駄使いはありません。

私は「心、感情、思いは事実を受け入れたくなくても、身体はどんな悲しみも苦しみも悔しさも辛さも、事実を全て受け入れて生きていく」と答えました。

瞑想する事でも、精神集中でも無く、当に無所得、無所悟。本当に何もならないのですから。

私は「心、感情、思いは事実を受け入れたくなくても、身体はどんな悲しみも苦しみも悔しさも辛さも、事実を全て受け入れて生きていく」と答えました。

それは、ただ身体と息と心を調える只管打坐の坐禅にこそ、生命の落ち着きと云う、絶対の安心があるからです。

頭の思い、心では、揀が起きる。だけど、身体はその揀をも受け入れて、生きる縁のある限り、何としても生き続けようと努力している。この生命に私自身が救われているのです。

それは、ただ身体と息と心を調える只管打坐の坐禅にこそ、生命の落ち着きと云う、絶対の安心があるからです。

頭、地球、大地、空気、水、自然、そして衣・食・住、人と人との縁。それら時間・空間・存在の全てが在って、私の命が生きている限り、今此処で、どんなことが有っても、その全てが私を護ってくださっているのです。それが仏様です。そこに落ち着

くのが坐禅です。世間の価値観、人間の損得勘定から言えば、坐禅ほど生産性も無く、非効率で、何の効果も無い、時間と身体が無駄使いはありません。

私は「心、感情、思いは事実を受け入れたくなくても、身体はどんな悲しみも苦しみも悔しさも辛さも、事実を全て受け入れて生きていく」と答えました。

それは、ただ身体と息と心を調える只管打坐の坐禅にこそ、生命の落ち着きと云う、絶対の安心があるからです。

頭、地球、大地、空気、水、自然、そして衣・食・住、人と人との縁。それら時間・空間・存在の全てが在って、私の命が生きている限り、今此処で、どんなことが有っても、その全てが私を護ってくださっているのです。それが仏様です。そこに落ち着

くのが坐禅です。世間の価値観、人間の損得勘定から言えば、坐禅ほど生産性も無く、非効率で、何の効果も無い、時間と身体が無駄使いはありません。

私は「心、感情、思いは事実を受け入れたくなくても、身体はどんな悲しみも苦しみも悔しさも辛さも、事実を全て受け入れて生きていく」と答えました。

それは、ただ身体と息と心を調える只管打坐の坐禅にこそ、生命の落ち着きと云う、絶対の安心があるからです。

頌 春

監録 金岡 潔宗



福寿無量 萬福多幸

新年明けましておめでとうございます。

昨年も新型コロナウイルスの影響により大変な一年でした。

皆さんはお正月、神社仏閣にお詣りして「今年こそは良い年でありますように」とお願いしますか。それとも「今年も良い年でありますように」と願いますか。

「今年も」という言葉の中には、昨年は有難うございましたという意味が含まれているのではないのでしょうか。

今年二月で九十六歳になられる通元東堂老師は、私が瑞應寺へ安居した時は、厳しく、特に溪寿寺用僧でお手伝いに行かさせて頂くと、本当に色々な事をご教授頂きました。最近の通元東堂老師は、お声をかけると手を合わせ「こうして私がいるの

は皆のおかげ」「ありがとう」「ありがとう」とおっしゃいます。

また、朝参の席でも「日々の行持が大切じゃ」「皆のおかげ」「有難い」「有難い」とおっしゃいます。今なお私たちに法を説いて下さいます。

ある寺院の掲示板に『「ありがとう」の反対は「あたりまえ」当たり前と思っている生活に喜びや感動はない」と書かれていました。

私たちは、生きていることが当たり前と思っていないか。明日も明後日もこのまま、ずっと続くと思っていないか。

大智禪師仮名法語には「この無常の殺鬼の人をうかがうこと、時として、その時ならずということなし。故に經に曰く、この日已に過ぎぬれば命も亦随って減ず。少水の魚の如し、是に何の楽しみか有らん。衆等各々勤め精進して頭然を救うが如くす

べし、但無常を念じて慎んで放逸なること勿れ、と。(中略)是を以て仏道をもとむる人は、まず生死事大無常の迅速なることを胸において、念々歩歩にこれをわする事なかれ。もしこの心なくば、まことに道をもとむる人にあらず。生死の大事を截断すること坐禪にすぎたる要経なし」と説かれています。

經に曰くとは、僧堂では八念誦でお唱えをしています。梵網經に説かれています。

少水の魚の如し、是に何の楽しみか有らん。三匹の魚が大きな波で岸に打ち上げられ小さな水たまりで、あつぷ・あつぷしていた。そのうち一匹が氣を強く持ち、跳ね回ってとうとう海に帰っていった。その次の魚は、あいつはあんなに元氣があるが俺にはない。でもこんなところに居ては死んでしまうと思いいじりじりと這いまわってようやく海に帰った。最後の一匹は、あんな馬鹿なことをしてダメだったら死んでしまう。ここにこうしてじっとしていれば必ず大きな波が来て海に帰れるからゆっくり待っていればいいと、じっとしていたら人間が来て大

きな魚がこんなところに打ち上げられていると言って持つて行ってしまう、命が亡くなった。というのです。私たちに、うかうかしていられない無常という殺鬼が命を狙っているという教訓です。そしてこの教訓を忘れることがあるなら道をもとめる人にあらずということです。

私たちは、生を求め、死を嫌うことが当然のように思いますが、元来、生も死も別々ではなく、尊い仏の御命なのです。この生死すなわち仏の御命なり。これを厭い捨てんとすれば、すなわち仏の御命を失わんとする

なり。これにとどまりて生死に著すれば、これも仏の御命を失うなり(正法眼藏生死)このわが生死は、仏の御命なのです。ですから、私たちは「ただわが身をも心をもはなちわすれて、仏のいえになげいれて」(正法眼藏生死)すべておまかせをすることが「生死の大事を截断する」ことであり、「生死の大事を截断する」には、坐禪にまさる道はないと説かれています。

頭念を救うが如く無常をおもい、少しでも坐る時間を持ちたいものです。 合掌



成道会献粥諷經



秋の山門



成道会献供諷経



大開静の後

謹賀新年

令和四年 壬寅

元正啓祚
萬物咸新

元旦の風景

佛國山瑞應寺
住職 村上 徳存
東堂 檜崎 通元
副住職 金岡 潔宗

寺選総代

河端 宏一

住友金属鉱山株式会社
総務センター長

地区総代

一区 三浦 廣志

三区 大條 雅久

四区 曾我部英敏

五区 本田 康忠

七区 篠原 元久

八区 伊藤 数義

九区 藤田 理

十区 鴻上紳一郎

瑞應寺専門僧堂

堂長 村上 徳存

師家 檜崎 通元

西堂 宮田 玄洞

堂監 門原 信典

監事 古川 承久

瑞應寺護持会

副会長 大條 雅久

学校法人ひかり幼稚園
同 保護者会



臘八摂心大開静

年頭所感

「叢林が基本だからな」

三十七年前、今は、東堂老師とお呼びしておりますが、当時は、堂監として私共を指導しておられました通元老師に、瑞應寺を出て、駒澤大学で佛教の勉強をしたい、と願いました時に言われた言葉です。

修行道場だけが叢林なのか、どこに居ても、その場を叢林と心得て生活せよ、ということなのか、今もまだ自分に問うています。

九十七歳になられた東堂老師は、今年も瑞應寺叢林を離れることなく、起居を共にして下さっています。有難いことです。この仕合せに感謝し日々を過ごしてまいります。

講師 越海 暢芳

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

年頭所懐

病毒蔓延経二霜
必須口罩吸呼吸
壬寅歳首瞻東旭
偏禱万邦恢日常

新型コロナ禍での生活は約二
年間に及んでおり、息苦しい口

罩（マスク）生活にも終わりが
見えます。

壬寅の年頭に際して、東方の
春の神に、世界が平常に回復す
るよう祈念するばかりです。

本年もよろしくお願いいたし
ます。

侍者 阿部 信宏

入制人事の致語に「此際幸い
に安居を同じゅうす、恐らくは
三業不善、当に望むらくは慈悲」
とある。今この時、幸いにも僧
堂安居に同坐出来ることを喜
び、未熟な身ではあるが、お互
いに扶け扶けられる慈悲の行持
を勤めていきたい。

コロナ禍を経験し激動の世の
中にあつても、宗門が安居修証
を第一とする限り、これからも
一箇半箇の真人が衆生接化に続
いていくだろう。私も佛國山に
おいて、変わりゆくこと変わら
ぬことをしっかりと見つめつつ、
老師父と老母の支助にも感謝し
ながら、本年もまたこれからの
真人達と同坐していきたい。

知客 家古 光祥

今年は、改めてこの道場の特色
を参究させ頂きたいと思ひます。

以前に比べ、安居している雲
納さんの人数は少なくなりまし
たが、それでも尚この道場を選ん

で修行に來られる方々が居られま
す、そんな雲納さん方のご希望
に添えるよう、この瑞應寺の特
色や家風を少しでも多く参究し
ておきたいと思つたからです。

それと、作務や檀務等を道場
にいる時と同じ心持で行つてお
りますが、煩わしさを感じるこ
ともなく、お檀家さんには好感
を持たれる様なので、清規の実
践と一緒に伝えしていきたいら
と思つております。

維那 吉松 聖博

新年明けましておめでとうご
ざいます。

この新年が皆様にとりまして
良き年でありますことを心より
祈念しております。

私事ではありますが、当僧堂
での典座寮の配役が、十年を越
えました。この御縁が今の私を
構築しているのだと思ひます。
然し乍ら一昨年来のコロナの影
響で大人数の料理は少なくなり
ました。修行僧の方も少なく
なり寂しいですが、今年はコロナ
が落ち着いて様々な行持が如常
に出来るよう願つております。

副典 足立 光顕

「吹毛常に磨す」という禪語が
あります。吹毛剣というのは鳥

の羽がふわりと落ちてきただけ
でスパッと切つてしまうほどの
鋭い剣です。その剣も、常に磨
いていないと切れ味が悪くなり
ますから、常に磨いていないと
いけません。このことから、こ
の禪語は修行に終わりが無いと
いうことを教えています。瑞應
寺に役寮として安居させていた
だいて数年ですが、修行に終わ
りがないことを改めて実感して
おります。何かと迷惑をかけ
ることもあるかと存じますが、
本年も何卒よろしくお願い致し
ます。

知庫 村上 徳樹

旧年中は病気で手術、入退院
を繰り返し、健康でいられるこ
とが当たり前ではない、という
ことを身に染みて感じた。

道場で大衆と一緒に生活をし
ていると自分も若いつもりにな
つてしまふが、大衆としてこ
こに居させていただいたのも
もう十年以上前の話。気持ち
は変わらないつもりでいても、
体は二十代の頃のようにはいか
ないようだ。

今出来ることが明日も出来る
とは限らない。日々の行持を大
事にし、行持あらん身心を大事
にしていきたい。

副悦 古川 承久

二陰一陽之謂道」

「二陰一陽これを道という」常
に移り変わっていく天地宇宙の
働きの在り方を顕わした『易経』
の言葉です。我ら人間も天地の
一部として陰陽の摂理のなかで
生きています。

さて、『法華経』には我ら人間
の世界を「三界火宅」といい、
迷いと苦しみで満ちた世界であ
ると譬えられています。まさに
今の時代を表現しているのでは
ないかと思われまふ。コロナの
災いが長引くなか、ウイズコロ
ナという新しい言葉まで出た
今、まさに我らの考え方や生き
方は全て問われています。

時代がどのように変わりに、い
ずれに流れても我ら人間は一日
一夜を過ごして行かなければい
けません。この問題については
人類の歴史上数多くの哲学者ま
たは宗教者たちの聖人が現わ
れ、さまざまな人間の在り方を
表現してくれました。「温故知
新」の言葉があるように、先人
たちが残した智慧の教えを今日
に生かすことが今を生きる我ら
の使命ではないかと改めて思う
所でございます。

『大智度論御垂訓』に我ら僧侶
の生き方が示されています。「仏
祖の正伝は、ただ坐にて候う。

：諸仏の御ふるまいのごとくに行
ぜさせたまひ候いて：諸仏の御ふ
るまいと申すは：寺の規式にした
がいて行い候うべし。規式と申す
は、寺にさだめおきたる一日一夜
の御振る舞いを申し候う」と。
「寝て坐つて食べる」これが私
の一日一夜の御振る舞いです。も
う、お斎座を準備する時間です。
では、今年もよろしくお願い
いたします。 蔵司 金範松

新年あけましておめでとうご
ざいます。昨年は新型コロナウイルス
イルス感染症の猛威を痛感いた
しました。百丈慧海禪師のお話
の中に「如何なるかはれ奇特の
事」と問われ「独坐大雄峰」とお
答えになられたお話がありま
す。意味はこの世の中で、最も
素晴らしいことは何ですかとの
質問に百丈慧海禪師は大雄峰
（百丈山の異名）にただ独り坐っ
ている事とお答えになられまし
た。私にとつて「如何なるかは
れ奇特の事」の答えは「一日一
日を大切に生きる」事です。人
生は楽しい事だけではありませ
ん。苦しい事、辛い事も沢山あ
ると思います。それらを含めて
大切に生きる事が素晴らしい人
生に繋がるのではないかと思ひ
ます。一日一日を大切に生きる

事を心がけて日々を過ごしてい
きたい。 直録 楠本剛大

入堂してから九ヶ月が経ち、
もうすぐ古参となります。実力
が伴わずとも古参になってしま
う訳で、少しでも実力が伴う古
参となるように日々修行に励ん
でおります。

「目は口ほどに物を言う」とい
う慣用句があるように、人は目
から多くの情報を得ています。
僧堂生活にも慣れ、怠けたい心
が出てきますが、自分の一挙手
一投足が仏様に見られていると
思い、何事も丁寧に修行してい
こうと思います。

首座 慧 岳

今まで様々な配役を任せても
らい、今は書記の役を頂いてい
ます。修行僧が少なくなり、一
人一人の負担が増えている中で
の、とても重要な役です。

書記という役は、私には荷が
重いように思う反面、この役をや
り遂げたいという気持ちも強く
あります。しかし、無理するの
ではなく、ただ自分の出来ること
をする。たとえそれが、小さなこ
とだったとしてもそれを一生懸命
にこなす。それが私の目標抱負
です。 書記 英 俊

テレホン法話 〇八九七 四一〇〇三三

禪のたより



成道

お釈迦様、ゴータマ・シッ
ダールタはインドのカピラ国
の王子として生まれました。

何不自由のない暮らしの中
で、十九歳の時に、生老病死
と云う人間の代表的な苦に、
自ら悩み迷い、その苦しみを
解決しようと真夜中に密かに
城を出られました。

王子と云う幸福な暮らしも、
世間的な飾りも、名誉も、全
て捨て出家し、名も無き一人
の修行者として苦行に身を投
じます。

シッダールタは、今までに
これほどの難行苦行をしたも
のは居ないと言われるような
修行を六年間も続けます。

しかし、「この身体を痛める
ことでは真の安心は得られな
い。」と苦行の無意味なる事を
知り、尼連禅河で沐浴され、
岸边で村娘スジャータの乳粥
の供養を受けます。

そして身体を調え、菩提樹下、
金剛座上に坐禅する事六年。

ある時は眉間に蜘蛛が巣を
張ろうとも、鵲が頭の上に巣
を作ろうとも、葦の葉が坐禅
を組んだ足を通り抜けようと
も、坐を崩される事は無かった。

成道の間際にはあらゆる魔
族が坐禅を妨げるように襲い
掛かります。それはシッダー
ルタの心に潜む全ての人類の
根源的な煩惱、迷い、苦しみ
でした。

しかし、その魔族の囀りも
破り、いよいよ成道の予感を
され、

「我、今もし無上菩提を証せ
ずば、むしろこの身を砕くべし。

我、今もし解脱の道を得ず
んば、ついにこの坐を起たじ」と
と誓願し、ひたすら坐禅を続
けました。これは四十九日とも
二十一日とも言われています。

そして、シッダールタ三十
歳、十二月八日の明けの明星
の輝く時。

「我と大地有情と同時に成道
す」と宣言され、目覚めた人、
佛陀は誕生されます。

これが成道。道を成す。真

実の道の完成です。

この大地の生きとし生ける
もの、山も川も草も木も、全
てが此処にあるように、お互
いの生命が無限に関わり合っ
て、美しい完全無欠の調和の
世界に輝き、躍動していたの
です。全ての存在が真実の姿
を実践し続けているのです。

この生老病死は、すなわち
「佛の御いのち」なり。

お釈迦様の成道によって、
今、迷い、苦しみの中を歩む
この私も間違いなく照らして
くださっていたのです。

この私達を取り巻く全ての
生命の営みも、私達の今日の
一日の行持も大地有情同時成
道の行持でした。

全国の道場では、今月一日
から八日の成道会まで、集中
して坐禅を勤めます。私達の
坐禅は成道、つまり「佛の御い
のち」の中の坐禅です。

大恩教主本師釋迦牟尼佛大
和尚様の金剛坐上の誓願に少
しでも応えたいものです。

合掌

佛國山瑞應寺堂監 門原信典

令和三年十二月一日～十日



■授衣作法

十一月三十日(火)略布薩・授衣作法が門原後堂式師のもと、行われた。

■臘八摂心

釈尊成道の聖日を因み、十二月一日(水)より八日(水)暁天まで、恒例の臘八摂心を修行。会中は、門原後堂(碧巖録・金岡監録(仮名法語)・越海講師(正法眼蔵(阿含経)・吉松維那(普勸坐禅儀)(正法眼蔵坐禅儀)の提唱を拝聴。会中の供養施主に深謝。また、参禅者の随喜加担に多大に助けられての摂心無事円成。法縁多謝。令和三年臘八摂心

供養施主(順不同)

当 山 総代会 殿
四国中央市 正覺寺 殿
香川 県 南隆寺 殿
愛知 県 森川法雲 殿
松山 市 義安寺 殿
岡山 県 東林寺 殿
今治 市 禅興寺 殿
今治 市 圓久寺 殿



成道会



小参

■成道会・断臂摂心

十二月八日(水)臘八摂心大開静、堂内朝課に引き続き成道会献粥諷経(金岡監録・小参門原後堂。行鉢は乳粥謹喫。午前、成道会正當諷経は、ひかり幼稚園児による唱歌に始まり、当山梅花講員による詠讃歌の中、出班焼香を厳修。

他、野菜、果物、菓子等多数頂戴。

広島 県 浄光寺 殿
岡山 県 中興寺 殿
広島 県 長福寺 殿
当 山 和敬会 殿
鳥取 県 玉泉寺 殿
梅花講 殿
兵庫 県 清陰寺 殿
西条 市 田中淑恵 殿
兵庫 県 鶴我昌三 殿
宮城 県 東禅寺 殿
高知 県 福泉寺 殿
福岡 県 高座石寺 殿
広島 県 東光寺 殿
岡山 県 長川寺 殿
愛知 県 宝泉寺 殿

白眉殿進捗状況

写真の通り工事が進んでいます。



十二月の日鑑

一日 祝禱
臘八摂心(八日迄)
五日 日曜参禅会
八日 成道会
九日 断臂摂心(十日迄)
十日 震旦二祖忌
祝禱・略布薩
十五日 祝禱・略布薩
祝音講・勉強会
十八日 観音講・勉強会
十九日 ベルモニー
合同慰霊祭
廿一日 略布薩・除夜

一月の予定

一日 大般若祝禱諷経
歳朝人事・年賀ノ拝
二日 角野消防団初祈禱
寿餅ノ拝
三日 年頭総代会
五日 おねはん受付開始
七日 日曜参禅会
九日 祝禱・略布薩
十五日 法戦式
十七日 観音講・勉強会
十八日 寒行托鉢(廿日迄)
十九日 略布薩
廿一日

銀杏感謝録

愛媛 県 實法寺 殿
静岡 県 龍泉院 殿
秋田 県 福昌寺 殿
岡山 県 大倉比登志 殿
岡山 県 尾崎治子 殿
北海道 長福寺 殿
広島 県 重楽寺 殿
長崎 県 田口寿子 殿
群馬 県 建明寺 殿
高知 県 永源寺 殿
鳥取 県 瑞應寺 殿
福岡 県 大満寺 殿

(令和三年十一月十二日受付迄)



鐘 声

「身心自からも愛すべし、自からも敬うべし」

これは修証義第五章行事報恩の中の一文です。

人の為に尽くす慈悲心はもちろんだ切ではありませんが、自分自身を大切にすることも大切な事です。

私自身、自分に自信が持てず、自から敬う事など考えた事もなかったです。自分を敬う事ができるよう、制中の首座の任、修行に励み、自分自身を成長させていきたいと思っています。

今冬首座